

2018年6月4日(月)

英会話道場イングリッシュヒルズ  
文書教材

## 今、再び、哲学について考える

生井利幸

### 1 問題提起

受講生の皆さん、まずはじめに、次の問題について想像してみてください。

「この日本では、いつ頃から『哲学』(ギリシア語: *philosophia*) という概念が生まれたのであろうか。」

### 2 展開

「深く哲学する」という行為は、一人ひとりの人間に対して、唯一無二の存在者として「生きる勇気」を与えてくれるものだ。

日本の歴史を振り返ってみると、江戸時代においては、日本語において「哲学」という言葉はなかった。日本で「哲学」という語が用いられるようになったのは明治時代初期。当時、西洋思想・哲学における諸概念を日本に紹介した人物は、西周先生(1829~97)である。

西先生は、「哲学」をはじめ、「主観」「客観」、さらには、「演繹」「帰納」「観念」「概念」「理性」「悟性」など、西洋哲学で基本となる諸概念を日本語に訳すことに務めた明治初期の啓

蒙思想家・哲学者である。

西先生は、青少年期には朱子学を学んだが、後に洋学の必要性に目覚め、1863年（文久3年）～1865年（慶応1年）年まで、オランダ最古の大学、ライデン大学に学んだ。

ライデン大学(Universiteit Leiden)は、創立1575年のオランダ最古の大学である。ライデン(Leiden、オランダ語の発音はレイデン)とは同国の西部に位置する都市を指し、ライン川の分流に臨む運河の街、また、ヨーロッパ有数の大学の街としても知られている。ライデンには、今でもルネサンス時代の建物が数多く残っており、同大学は、自然法の父であり、また、国際法の祖としても名を馳せたグロティウス(Hugo Grotius, 1583-1645)などの有名な学者を擁したことで広く知られている。

西先生は、オランダから日本に帰国後、徳川幕府の開成所の教授に就任。幕府が崩壊した後は、一時、沼津兵学校の教授として教壇に立ち、1870年（明治3年）、明治政府の要請により兵務省に入省。西先生は、1873年に明六社の創立に参画。その後、東京学士会院会長、東京師範学校校長、元老院議員、貴族院議員を歴任した。

西先生が影響を受けた哲学者は、A・コント、ジョン・スチュアート・ミル、W・ハミルトンなどである。主な著書は、『百学連環』、『百一新作』、『知説』、『人世三宝説』など。西先生は、百学連環（統一科学）を樹立することを「ヒロソヒー」と呼び、日本語ではこれを「哲学」と訳し、日本で初めて「哲学」という言葉を用いた学者である。

わたくし生井利幸は、かつて、オランダのフローニンゲン大学(Rijksuniversiteit Groningen)の法学部に研究室を構え、「医事法」(medical law)を研究。

フローニンゲン大学は1614年創立で、オランダで二番目に古い大学である。フローニンゲンも、運河の街、大学の街として知られており、運河や自然に囲まれながら深い思索ができ、美術館、画廊、ブラウン・カフェなども点在しており、まさに「学問・文化・芸術の匂い」を満喫できる街である。

わたくし自身、フローニンゲンに居を構えていた当時は、毎日、西先生のことを考えていた。言うなれば、西先生は、「私の心の中における『恋人』」のような存在である。

わたくしにとって、西先生は、「幼少期からの憧れの先生」。それ故、わたくし自身、人生のほとんどの期間にわたって思い慕っていた西先生が研究生を送ったオランダにて「西先生と同じ国で、同じ空気を吸う日々を送る」という経験には、「自分の人生をかけた大きな意味」が存在していた。

「オランダで哲学する」、即ち、「オランダで哲学書を書く」という行為は、わたくし自身、1)「西先生の哲学・精神を引き継ぐ」、2)「自分の『使命』(mission)を全うする」という意味がそこにあった。

教養人・見識者等の間では、「現在の日本社会は、『思索不在の社会』である」という見方・捉え方が一般的である。それ故、わたくしは、これからも、日本人々が、深い思索を通して「より人間らしい生き方」を模索・実現するための一助となるべく、草の根的に啓蒙活動を行っていく所存である。